劉枝萬著『臺灣の法教—閭山教科儀本と符式簿の解讀—』

松本浩一

法教の名前は、臺灣の日本統治時代に出版された丸山圭治郎『臺灣宗教調査報告書』にすでに現れている。[1]その九七頁に道士の宗教的なレパートリーを擧げたあと、法教について「然ルニ又別ニ法教ト云フモノアリ。其ノ徒ノ言フ所ニヨレバ、亦タ自ラ一派ヲナセルモノ、如キモ、必竟道教ノ一部タルニ過ギザルモノナリ。而シテ其ノ一派ニ三奶教ナルモノアリ、弘ク臺灣ニ行ハル。……其ノ教ハ全ク度死ノコトニ關セズ、專ラ度生的行事ノ中特ニ驅邪押煞ノ法術ヲ行フモノナリ（標點は筆者）」と述べている。ここでは「道教ノ一部」にすぎないとしているが、法教の一派に三奶教があり、また專ら驅邪押煞の法術を行うことを指摘している。さらにこの後の「巫覡」についての項には、その一つとして「法師」を擧げ「其他ニ童乩ノ徒ト結ヒテ、降神看佛字等ヲ行ヒ、禁呪符水ヲ用ヰテ、人ノ爲ニ病ヲ療シ災ヲ除クモノ亦之ヲ法師ト稱ス」としているが、まさにさきの「驅邪押煞ノ法術ヲ行フ」とあわせて、これらは現在の法師の役割に相當する。

劉枝萬氏は研究者として、戰後この法教の研究に取り組み、『中國道教の祭りと信仰』下卷[2]の全部を占める「閭山教の收魂法」と名附けられた部分では、閭山教を傳承する彰化縣竹塘鄉の詹法師の收魂法を詳細に紹介し

ている。また『臺灣の道教と民間信仰』には、法教に關連する論文「臺灣のシャマニズム」と「臺灣の道教」が含まれており、前者は主として法師と關係の深い童乩の概要を、後者は題名が「道教」となっているが、法教についてもその系統や法事について概觀している。[3] その他に呂理政氏や李豐楙氏、吳永孟氏、日本では筆者や古家信平氏などによって、法師の研究が進められ、最近では臺南の法師の系統と法事（呪術儀禮）について、廣範な調査を行った研究書が出版され、[4] 法師の研究は注目を集めてきている。劉氏の研究はまさにそのパイオニアというべきものである。

風響社社長石井雅氏の「はじめに」にあるように、本書はその劉枝萬氏の遺稿を編集してなったものである。その内容は前編が「法教概略と所藏科儀本」と題され、第一章「臺灣の法教について」、第二章「臺灣の法教資料」、そして第三章「所藏科儀本」からなっている。第一章は法教の概説であり、臺灣の法師の系統と彼らが行う法事について述べられているが、もともと一九九八年に汲古書院から出版された中村璋八編『中國人と道教』に、「臺灣の法教」として收められていたものである。第二章は第三章で紹介・影印されている閭山教の科儀本についての由來と位置づけについて、石井昌子氏が劉氏に聞き取りを行った結果が示される。それによれば、ここに收めた資料は新竹縣の客仔師の一派のもので、一八一六年から一九二二年の間に筆寫されたものであるという。劉氏によれば、客仔師は潮州の客家の出自を示すもので、儀禮の系統としては三奶派か閭山教で、福建系の法師に伍して清朝時代には活躍が目覺ましかったが、日本統治時代になると急速に衰えてしまった。これらの資料は、出所が明らかなうえ、この壇（法師は道士と同じように自宅に壇を構えることが多い）の盛んだったころの儀禮内容を傳える點で、價値が高いと劉氏は述べている。

ここに影印された科儀本は全部で二四種類あるが、表1の「備考」によれば、「請神」に關わるものが四種（うち一種は法事内容を含む）、治病など法事内容に關わるものが一〇種、後編で考察される符式簿が一種、法事で

用いられる文書に關わるものが一種、教團の戒律に關わるものが三種、教團の內部文書が三種、「無題」とされるものが二種ある。「無題」のものについては痛みも激しく、內容も多岐にわたっている。法師が科儀本を使用する時には、書いてある順に唱えたり、節をつけて歌ったりすることもあれば、儀禮內容によって、いくつかをピックアップして唱えることもあり、その際には順番も異なってくる。それですでにその儀禮自體が滅びてしまっているため、儀禮によっては科儀本によって儀禮內容を推測することは難しいこともある。それで他の一派が用いている科儀本（および行っている儀禮の內容）と、比較しながら研究するための素材としての意味が大きいと考えられる。

たとえば第一番目の『頭壇請神書』は、「「請神」とは、神祇の降臨を乞う科儀」で、「三奶夫人率いる神軍はもとより、その他閭山教の五營乃至三十六營兵將護衞のもとに招請される神祇は、道教・法教の高神位をはじめ、民間信仰を反映した地方神や觀音菩薩・普庵祖師などの諸佛を含」んでいるという。あるいは第十番目の『太上玄科進嶽分錢眞經』は「生命が危殆に瀕している重態の病人に對して行う、他界の魂魄主宰神に獻金して贖命し、魂魄の現狀を觀察するという閭山法場であ」り、「趣旨は、法師が神童（童乩）を「關」の法術によって神懸らせ、使者として他界をへめぐり、獻金すなわち紙錢を燒いてまわる路關と、あとに魂宮で魂魄の狀態を確認する看魂宮の段落にわかれる」と述べられている。臺南の東嶽殿で毎日多くの法師によって行われている「打城」という法事では、はじめに神將そして神々に來臨を願う「請神」があり、「召魂」をはさんで。東嶽大帝に亡魂の解放を願うために法師が地獄に降りて行く「路關」が續くが、このような同樣の目的を持った法事で用いられているテキストと比較することによって、それぞれの特色と系統とを明らかにすることが期待される。その點で劉氏へのインタビューによって、この科儀本の內容と性格とを明らかにした石井氏の作業は貴重であるといえる。

この著書は全體で八〇〇頁あまりという大著であるが、

このうち五〇〇頁弱を占めるのが、後編の「符式簿の解讀」である。符式簿とは劉氏の定義によれば、「書類の決まった書き方を書式というのにならって、符令の書き方を符式というから、これを一冊にまとめれば、符式簿になる」ということになる。ここで取り上げられた符式簿については、「殊に普庵祖師が、しばしば登場しているから、普庵教法師の傳抄本と推定されるが、……閭山教との習合現象も、深厚である。總じて、内容はあまり教派に拘泥することなく、みな一様に扱われており、雜駁な民間信仰の面目、躍如たるものがある」としている。實際に法師は複數の法師から教えを承けたり、勝手に學んだり、自らアレンジしたりすることも多いので、どの派の傳統を傳えるものか、ということは特定しづらいのであろう。

はじめに第四章「總説」で、符式簿の意味・内容、符令の材料、符紙の材質と色、符令の書寫器具、符令の文字・記號などについて述べられるが、「一〇　符令の構成と天人相關的宇宙觀」は、續く「各符の解説」を讀んでいく場合、まず目を通すべき部分で、「符令を起立した人體に見立て、上部の書き出しを符頭、下部の書き終りを符脚と稱し、それぞれ特定の記號が設定されている」として、その符頭、符脚に良く用いられる記號について解説している。

第五章「各符の解説」は、この符式簿に納められた1號から123號までの符について、それぞれの符が用いられる目的、符の構成と構成要素に關する分析などの解説がなされている。5號符を例として解説の内容を見ていくと、まず初めに「5號符「奉敕令、五雷大將軍追收……妖魔鬼怪精亡」(五雷收妖符)」とあって、符の番號と符の冒頭および末尾の句、そして符の分類が記される。次に符の説明に「大門上、安床上可用」とあって、表門に貼り、寢臺に貼るべきこと、辟邪符の一種である五雷收妖符であること、3號符と4號符と組み合わせて三幅對になっていることが記される。そして符頭が三清記號(レ點三つ)を主體にしてその下にある日月や北斗七星、南斗六星の三光記號と合せて、分離式二重符頭を構成し

ていることが指摘される。

次に符の寫眞が示され、横に符文が注として附せられている。符文は三段に分かれ、全體で「某司令神の命を奉じ、五雷大將軍が主動神として、八卦祖師・神農大帝・南極先師・九天玄女・鬼谷先師・雲夢山先師・巧聖先師・六丁六甲諸神の加勢という仰々しい陣容で、總出陣して天降り、病家に赴き、患者に祟っているすべての惡靈を征討し、全滅して治癒し、もって一家に永く安寧を保たせる」という意味を示しているとしている。ここでも「八卦祖師（3・4・6・10・32・77・97各號符參照）」のように神名のいくつかには、「他にこの番號の符に見える」という參照のための注記が括弧内に示されている。このような參照は符の解説にしばしば現れ、相互參照の便が圖られている。最後に符脚は、「『印』字を縱に割って『卩』部首と『E』にし、中に『罡』字をはめこんだ『罡印』二字の重複式である」とし、「全體としては、均整がとれた、莊重な符令である」と結んでいる。

しかしこの解説で注目すべきは解説の後に附せられた「附記」である。ここの附記には1と2があるが、1には「八字髭型五雷記號」について解説され、2ではこの5號符が4號符3號符と組になっているのに注目して、「複數の組み符令」について、「二符組」、「三符組」、「四符組」、「五符組」、「六符組」、「十四符組」に分け、それぞれ例を擧げて解説している。「五符組」は特に多く、五營がその根幹になっていることを指摘している。ここの附記は符に關する解説の補注の意味が強いが、他にも九天玄女や白鶴仙師などの神々、關煞（「八字すなわち生年月日時によって、必然的に遭遇する、難病を含めたもろもろの災厄」）などの民間宗教者がしばしば言及する概念についての解説・考察が見えている。ここは劉氏の廣くて深い學識が惜しげもなく披露されている部分であり、符の研究というだけではなく、およそ中國・臺灣の民俗宗教に關心を懷くものにとっては最も興味深い部分といえる。實際筆者もはじめてこの本を手にしたとき、氣が附いたらこの部分だけをピックアップして、讀み進めていた覺えがある。このような解説・考察は、符の解説の

中にもちりばめられており、この解説が決して符の構成の分析というだけに終わっていないことを示している。

とはいえこの解説は、やはり符の研究に力点が置かれていることは間違いない。符の圖形それぞれの意味を解讀した研究としては、Henry Dore, Researches into Chinese superstitions, Vol.Ⅲに先驅があるが、[5] それ以降學術研究に値するような研究は行われていないといってよい。劉氏の分析はあまりにも大きな第一歩を踏み出したものといえる。またこの分析をもとに、各符の使用目的、登場する神々、用いられる語句、そして記號などの相關關係について計量分析を進めることも可能かもしれない。劉氏は後編の「總說」の最後に「本符式簿所載の符令に展開されているのは、靈界における、息詰まるような、絶え間のない、鬼神の鬪爭に他ならない。……正神は必ず邪鬼に勝って、衆人に無病息災の平安な生活がもたらされるという、庶民のはかない願望がにじみ出ているのである」と述べ、ここには庶民の願望が表現されていることを強調している。長年にわたって民俗宗教の研究に生涯を捧げられてきた、劉枝萬先生ならではの感慨といえるかもしれない。

（A5版、八一六頁、風響社、二〇一九年一月、八〇〇〇圓（税別））

註

（1）丸山圭治郎『臺灣宗教調査報告書』（臺灣總督府、一九一九年）。

（2）劉枝萬『中國道教の祭りと信仰』下（櫻楓社、一九八四年）。

（3）劉枝萬『臺灣の道教と民間信仰』（風響社、一九九四年）。

（4）戴瑋志〔ほか〕『臺南傳統法派及其儀式』（臺南市政府文化局、二〇一三年）。

（5）Henry Dore, Researches into Chinese superstitions, Vol.Ⅲ（臺灣・成文出版復刻、一九六六）。